# モナキウム・サクルム
## ――「キリスト教国」バイエルンでのカトリシズム体験(2)――

今　野　　元

### 第三章　ローマ典礼（特別形式）

第二ヴァティカン公会議後の典礼改革で現在の「新ミサ式次第」(「パウルス六世式典礼」）になったため、トリエント公会議以来通用していた「トリエント典礼」(「聖ピウス五世式典礼」）は廃止こそされないまでも、例外的なものとされて行われることが稀になった。典礼改革に伴う変更点は種々あるが、目立つのは以下の点である。⑴聖職者が信徒とともに「中央祭壇」(Hochaltar）を向いて、つまり「神の方を向いて」(versus Deum）儀式を行うのではなく、「人民祭壇」(Volksaltar）の上で、つまり「信徒の方を向いて」(versus populum)、「中央祭壇」に背を向けて儀式を行うようになった、⑵聖職者が中央祭壇に向かい小声で祈る部分が、全て信徒側を向いて大声で行われるようになった、⑶説教以外の大半の部分で用いられてきたラテン語は、公会議でも引き続き遵守を原則とされたにも拘らず、新たに許可された現地現代語に一気に駆逐された、⑷侍者（Ministrant）などに女性の奉仕が認可されるようになった。こうした変更は1960年代の世界大の民主化・平等化潮流や、教会一致運動（エキュメニズム）への対応として行われたもので、カトリシズムの時流への歩み寄りである。聖職者は信徒の先頭に立って神に奉仕する者から、信徒に奉仕する者へと変わり、「神奉仕」(Gottesdienst：礼拝）は「民奉仕」になった印象がある。司祭が「人民祭壇」で聖変化を見せる様子は、理科の教師が生徒の前でフラスコや試験管を用いて実験をして見せる有様を想起させる。「人民祭壇」の設置により、司祭の動作は信徒からよく見える様になったが、一同挙って神に祈るという敬虔な雰囲気が失われ、司祭が神に背を向けて信徒に奉

仕している様に、或いは司祭が現人神として信徒に語っている様に見えるようになった。また古典語の祈禱文が有する音韻が除去され、現代日常語による散文での「言挙げ」が重視されるようになった。男女の役割分担に関しても、現代フェミニズムの期待するものに若干近付いた。このような重要な変更は、カトリシズムに相応しないとの批判を一部から招き、なかでもフランスのマルセル・ルフェーヴル大司教ら典礼改革を拒否する「聖ピウス一〇世司祭修道会」は、教皇庁と対立して破門者を出す程であった。教皇ベネディクトゥス一六世は、既に教理省長官時代からこの典礼改革に批判的で、自発教令「スンモールム・ポンティフィクム」で旧典礼を「ローマ典礼（特別形式）」として復活し、更にラテン語重視の方針を打ち出し、「聖ピウス一〇世司祭修道会」の破門も解除した。

この様に論争点となっている「ローマ典礼（特別形式）」を、筆者はミュンヒェン滞在の当初から、実際に観察することを意図していた。実際ミュンヒェンで筆者は二度、この「ローマ典礼（特別形式）」に遭遇した。最初は2012年６月24日アンデクス修道院での「三聖体祭」である。二度目はほぼ同じ頃、マリーエン広場に近い聖ペーター教会（アルター・ペーター）での日曜礼拝に於いてである。なおテアティーナー教会ではドミニコ会士により盛んにラテン語のミサが行われていたが、これは使用言語がラテン語なだけで、形式は「新ミサ式次第」に依っていた。

更に2012年12月30日、筆者はリンダウ郊外ヴィグラツバートの「聖ペトルス司祭修道会」を訪問した。この団体は、「聖ピウス一〇世司祭修道会」と別れて教皇の傘下に残った旧典礼派で、ラッツィンガーとの関係も深い。この団体のことは、アルトエッティング巡礼中に参加者の一人から聞いていた。既に12月16日に一度訪問を試みたが、乗る電車の車輛を間違えて、途中で別な方向へ向かってしまい、到達できなかった。気を取り直して12月30日に再挑戦し、9時46分頃にヘルガッツ駅に到達した。人気のない田舎の駅には何ら掲示がなかったが、住人に道を尋ねて歩いていくと、10時にはヴィグラツバートに到着した。隣にゲームセンターがあるのには驚かされたが、駐車場に大きな修道士の立像があり、その向こうに聖ペトルス司祭修道会の宗教施設が展開し

ていた。

聖ペトルス司祭修道会の宗教施設は、多くが新しいもので、新興宗教の本拠地の様だった。この団体が志向している典礼上の伝統主義とは裏腹に、建物はどれも現代的な建築様式であった。比較的古典的に見える小さな「恩寵礼拝堂」(Gnadenkapelle) に入っていくと、入口に Venite Adoremus ([嬰児イエスを] 行きて拝まずや：聖歌 Adeste Fideles の一節) と金文字で書かれており、丁度「ローマ典礼 (特別形式)」のミサが行われていた。祈禱文は全てラテン語だが、説教はドイツ語である。礼拝堂は小さく質素なものであったが、人民祭壇がなく、中央祭壇も極めて小さかったが、中央祭壇の上に大きな聖母マリアの像があった。十字架上のイエス像は、正面ではなく脇にあった。マリア像は戴冠しており、イエスは抱いておらず、各方向に針のように細い光背が出ており、余りに写実的で、妖艶な感じすらある若い女性の像であった。一人の司祭と一人の侍者がミサを行っていたが、司祭はアングロサクソン系らしく、ラテン語、ドイツ語に訛りがあった。小さな礼拝堂なので参加者も少なかったが、皆ラテン語の典礼には慣れているようで、司祭との掛け合いは順調であった。入口付近に世話役の老婆がおり、カメラを向けて注意されるかと恐れたが、逆に小さな聖歌集をくれた。

ローマ典礼 (特別形式)
(12月30日ヴィグラツバート)

11時頃恩寵礼拝堂でのミサが終ったので、周辺を歩いていると、丘の上の現代的な建物で鐘がなり、人々が集まり始めた。それは「贖罪教会」という建物で、この宗教施設の中央礼拝堂であった。鉄骨が目立つ現代的な建物で、やはり人民祭壇がなく、中央祭壇は地味で、大きな十字架に掛けられたイエス像が掲げてあった。結局のところ、由緒ある古い教会では今日「新ミサ式次第」が行われるので、「ローマ典礼」をやるには田舎に新たな教会堂を建設する必

贖罪教会（12月30日ヴィグラツバート）

要があるようである。更にミサが始まって驚いたのだが、確かに「ローマ典礼（特別形式）」が行われていたものの、祈禱文はドイツ語であった。筆者はミサから抜け出して、隣の売店でどうして店員にドイツ語なのかと聞いたところ、「ラテン語では信徒が理解できないから」という話であった。伝統志向の聖ペトルス司祭修道会でも、ラテン語のみでは十分には人が集められないようだった。

2014年9月12日、筆者は再度のミュンヒェン訪問に際して、ミュンヒェン市内で聖ペトルス司祭修道会を訪れる機会があった。この間に、聖ペトルス司祭修道会は聖ミヒャエル教会から程近いダーメンシュティフト教会をミュンヒェン＝フライジング大司教座から委託され、ミュンヒェン中心街で恒常的に「ローマ典礼（特別形式）」を披露する権限を獲得していたのである。パチェッリ通の大司教座文書館で調査があった筆者は、帰りにダーメンシュティフト教会を訪れた。ヴィグラツバートと違い、ミュンヒェン中心街のこの教会は絢爛豪華なバロック教会であり、「ローマ典礼（特別形式）」の舞台装置としては最適である。平日ということもあって、集まった信徒は多くはなく、開式直前で20人ほどに過ぎず、皆一風変わった人々であった。彼等は司祭のところで告解を済ませ、こちらに座っている様だった。その中の或る女性が、筆者と同じく後ろの席に座っており、松葉杖を突いていたので、筆者が代わりに聖歌集をとって渡そうとしたところ、筆者のことを文字通り完全に無視した。ミサは司祭一人、補祭一人で行われたが、これまで経験したことのない、聖歌の全くない静かな礼拝で、短かった。聖体拝領の際は、信徒たちが前で跪き、「口による聖体拝領」（Mundkommunion）を行っていた。だが参集した人々の内、聖体拝領をしなかったのは筆者だけでなかった。聖体拝領しない人々は、

一体何の為に集まっていたのだろうと思った。

## 第四章　急進的マリア崇敬派及び反教会派の示威行進

ミュンヒェンはドイツ・カトリシズムを象徴する町であり、同時に多様な文化を包含する大都市でもある。この町に長く住んでいると、キリスト教急進派の示威行進に出会うことがあるが、ベルリンと同じ様な反キリスト教会派の示威行進に遭遇することもある。

キリスト教急進派（正確には急進的マリア崇敬派）の示威行進に、夕方の蠟燭行列（光の行列）がある。これがどういう団体により、どういった周期で行われるのかは、筆者にはよく分からなかった。2012年9月9日、訪独中の櫻井健教授夫妻と夕食を摂ったのち、テアティーナー通でマリア講の一団に遭遇した。蠟燭を持ち、ロザリオの祈りを唱えながら、百人ばかりの人々がマリーエン広場の方向へと歩いて行った。行列の中に居る女性が、道行く人に聖母マリアの御真影を配り歩いていた。2014年9月14日には、マリーエン広場で「バイエルン守護聖女」（Patrona Bavariae）たる聖母マリアを崇敬するバイエルン愛国主義者の集会があり、聖ペーター教会での礼拝のあと、中心街で蠟燭行列が行われ、滞独中の山本順子教授とこれを見学した。

こういった急進的マリア崇敬派は、ミュンヒェンのカトリック教徒の間でもやや奇異に見られている面がある。2012年4月の巡礼で知り合った或る一家では、親族の一部がこの集団に参加しているものの、奇矯だとして警戒していた。2014年9月14日の蠟燭行列でも、我々が最後尾からお喋りをしながらついていったところ、すぐ前に居た神経質そうな女性に怒鳴られてしまった。修行である蠟燭行列の参加者として、お喋りは不謹慎だということなのだろうか。かなり殺気立った女性だったので、筆者たちも面喰らった。

これに対して反教会派の運動として筆者が注目していたのが「クリストファー・ストリート・デイ」、つまり同性愛者の示威行進であった。ベルリン留学時代、筆者は「クリストファー・ストリート・デイ」や「ラヴ・パレード」が現代ドイツの夏の風物詩になっていることを知った。共に若者が中心街の路上で大音響の音楽を流して踊り狂う行事であるが、前者は同性愛の性風俗

ショウであり、同性愛者への「寛容」を訴える政治的行事である為、政治家が参加して自分の「寛容」さを誇示することも多い。ベルリンのそれは兎も角大規模で、ウンター・デン・リンデン、ブランデンブルク門からエルンスト・ロイター広場付近まで若者が埋め尽くし、男性が並んで平然と道端で放尿し、女性が半裸で踊り回る様子に、強い印象を受けたものである。筆者は、ベルリン、ハンブルク、フランクフルトのような左派の金城湯池だけでなく、ミュンヒェンでもこの行事は行われると予想した。寄席芸人でもある人気者のミュンヒェン市長クリスティアン・ウーデ（SPD）は、自身が同性愛者とも言われる人物であり、「クリストファー・ストリート・デイ」を応援すると思われたからである。ただミュンヒェンはドイツを代表する宗教都市でもあり、同性愛を問題視するカトリック教会がどう反応するのかに興味を懐いていた。カトリック教会が聖体行列に使用するマリーエン広場からルートヴィヒ通にかけての記念碑群の間を、同性愛者が大行進するとしたらどうなるかと想像した。

2012年の「クリストファー・ストリート・デイ」は7月15日に行われた。マリーエン広場には、大きな特設舞台が設けられ、多くの人々が集まっていた。舞台の上には、Christopher Street Day 2012、fight for global rights – Solidalität kennt keine Grenzen と書かれている。英語が多用されているのは、この行事がどこからきたのかを暗示している。舞台の背景には、「我々は多数だ」（Wir sind viele）と書かれている。舞台で歌う歌手の内、男性一人が上半身裸である。「バイエルンの守護聖女」たるマリアの円柱の周りには鉄柵が設けられ、見物人が円柱に攀じ登れない様になっていた。だが恒例の行列は、マリーエン広場やルートヴィヒ通には現れなかった。広場から南下すると、コルネリウス通、ゲルトナー広場付近で行列に遭遇した。女装して肌を出す男性、上半身裸の男

クリストファー・ストリート・デイ（7月15日）

性が見えたが、服装はベルリンよりは明らかに穏やかだった。レーダーホーゼにアルペン帽という典型的なバイエルンの恰好をした男性集団も居たが、一見すると同性愛者には見えなかった。

クリストファー・ストリート・デイの行列
（7月15日コルネリウス通）

## 第五章　ズデーテン・ドイツ人大会

戦後バイエルンの初夏の風物詩の一つがズデーテン・ドイツ人大会である。ドイツ人難民はバイエルンにもベーメンやシュレージエンから流入したが、なかでもベーメン出身のズデーテン・ドイツ人同郷団（Landsmannschaft）は、バイエルン政府から支援を受け、毎年大きな大会を開催し、バイエルン首相がそこに参加して演説するのが年中行事となっている。大会は近年、アウクスブルクとニュルンベルクとの間で交互に開催されているが、2012年はニュルンベルク見本市会場で開催された。

2012年5月25日（聖霊降臨祭土曜日）、10:30から開会式が行われた。冒頭はバイエルン国歌、ドイツ国歌の斉唱である。バイエルン自由国（州）からは労働・社会秩序・家族・女性大臣クリスティーネ・ハーデルトハウアーが所管大臣として参列し、連邦政府からは連邦内務省政務次官クリストフ・ベルクナーが参列した。ハーデルトハウアーは、バイエルン州のズ

ズデーテン・ドイツ人大会開会式（5月25日）

デーテン・ドイツ人への支援を強調すると同時に、「復讐という発想は捨てなければならない」と釘を刺した。続いて巨漢のヨーロッパ議会議員ベルント・ポッセルト同郷団長（Sprecher：ズデーテン・ドイツ人の二世）から「ヨーロッパ・カール賞」（ローマ皇帝カール四世に因む）授与があり、今年の受賞者マックス・マンハイマーが演説した。彼はベーメンの「ユダヤ人」としてアウシュヴィッツに送られ、生還すると今度は「ドイツ人」としてベーメンから追放されたのだという。式典の最後は「ヨーロッパ国歌」(Europahymne) たるベートホーフェン第九の斉唱だった。ドイツ人嫌悪の為か、この曲は歌詞 ( ドイツ語 ) なしで単に吹奏されるのが正式だが、この場ではシラーの歌詞が堂々と歌われていた。見本市会場の広い構内では、農民団体、教会、ベーメン各地のドイツ系新聞の店、カールスバート･オブラーテン（ウエハース菓子）の店などが軒を連ねている。歴史の記述もあったが、ドイツ国民社会主義政権の侵略と、現地ドイツ人の営みとが共に紹介されていた。CSU や SPD 系のフリードリヒ・エーベルト財団も窓口を設けている。夜は皆が民族衣装で再集合して民俗芸能（音楽、舞踊など）の披露があり、ビア・ホールにはプラーク、オルミュッツなどベーメン内地区毎の席が設けられた。ビールやヴルストを出すのは SDJ（Sudetendeutsche Jugend：ズデーテン・ドイツ人青年団）である。

2012年 5 月26日（聖霊降臨祭日曜日）、9:00から日曜礼拝が行われた。ズデーテン・ドイツ人の多くはカトリック教徒で、大きなホールで大規模なミサが行われた。入堂行列には、民族衣装の集団がベーメン各地域の旗を掲げて司教たちを先導した。少数のプロテスタント教徒は、別室で牧師を迎えて礼拝を行った。双方の礼拝が終わると、11:00から全員で総会が行われた。バイエルン首相ホルスト・ゼーホーファー、前首相ギュンター・ベックシュタイ

ズデーテン・ドイツ人大会のカトリック礼拝
（5月26日）

ンらが登場した。ゼーホーファーは、バイエルンは「キリスト教国」だと宣言し、ズデーテン・ドイツ人はバイエルン国民の重要な構成要素だと強調したのだった。

ズデーテン・ドイツ人大会のプロテスタント礼拝
（５月26日）

## 第六章　バイエルン・カトリック・アカデミー

カトリシズム研究に於けるミュンヒェンでの筆者の関心事は、専ら大衆信仰の実地検分であったが、学術都市ミュンヒェンに居るからには、カトリック知識人の世界にも触れなければならない。

バイエルン・カトリック・アカデミー（Katholische Akademie in Bayern）は、当初から筆者が期待していた施設であった。この施設は、バイエルン（旧王国領）の７つの大司教座、司教座の設置した「公法上の教会財団」で、1957年に設立され、一般市民向けに学術講演会などを企画している。所長のフロリアン・シュラー博士はいつも明朗快活な神父で、アウクスブルク出身のため南独的な発音が印象的であり、カトリック・アカデミーの運営と並んで小教区での司牧も担当していた。このシュラー神父は、かのラッツィンガー・ハーバーマス論争の仕掛人であり、カトリック・アカデミーの大半の行事で司会を務めていた。

バイエルン･カトリック･アカデミー（５月５日）

筆者は2012年４月にミュンヒェンに到着すると、早速その

場所を探し、ミュンヒナー・フライハイトから東へ徒歩3分、英国庭園の近くにそれを見つけた。このカトリック・アカデミーの本館は、設立に貢献したミュンヒェン＝フライジング大司教の名前を採って「ヴェンデル枢機卿館」（Kardinal Wendel Haus）と呼ばれており、現代建築で、宿泊も可能である。本館の前には、バイエルンを象徴する力強い獅子の石像があったが、どうしたことか下顎が欠けたままになっている。本館周辺にも幾つかの建物があるが、緑の芝地の後ろには、小規模だが古風な宮殿があり、迎賓館になっていた。筆者は催物の内容を確認して、後日再訪することにした。

最初に訪問したバイエルン・カトリック・アカデミーの行事は、2012年5月5日の「アルトシュヴァービング・マイバウム設立式」であった。英国公園を散歩しつつ、10時30分にカトリック・アカデミーに到達すると、そこには深緑の帽子に革の半ズボンの民俗衣装を着た男性たちが集まっていて、マイバウム設立の準備を始めていた。男性たちは、ミュンヒェン東方のエーベルスベルクの農民たちだという。マイバウムは、先の部分に風見鶏や針葉樹の葉で作った輪を取り付けた後、数十人の男性が木製の道具を用いて少しずつ設立するものであり、大変な重労働である。作業の最中に、既に近辺ではビールガルテンの準備が整い、シュラー神父の司会でビールの大きな樽が開けられ、カトリック・アカデミーの印のついたジョッキで販売され始めた。「ミュンヒェン・オクトーバーフェスト楽士団」がバイエルン分列行進曲を奏で、バイエルン愛国主義の雰囲気を盛り上げた。また農民の一部が、アコーディオンの伴奏で、長い糸の付いた釣竿を振り回し、バチンバチンと鳴らし始めた。マイバウムは少しずつ、ゆっくりと設立され、12時30分頃真っ直ぐに立てられた。するとどこからともなく

シュヴァービングのマイバウム設立式
（5月5日）

クレーン車が現れ、マイバウムに装飾を付け始めた。装飾は、教皇ベネディクトゥス一六世の紋章、バイエルンの大司教、司教の紋章、バイエルン国章、ミュンヒナー・キンドル、カトリック・アカデミーの紋章、カトリック・アカデミーの講演風景を現したもの、芸術の街シュヴァービングを現したものなどがあった。全て飾りがついた時には14時になっており、楽団の伴奏でバイエルン国歌の斉唱が行われた。ビールガルテンにはバイエルン好きの人々が溢れ、中には一週間前のアルトエッティング巡礼で同行した男性もいた。

バイエルン・カトリック・アカデミーで最初に参加した学術講演会は、2012年5月14日の政治学者ハンス・マイヤーの顕彰会であった。1931年生まれのマイヤーは大柄な、南独訛りのドイツ語とにこやかな表情が印象的な老紳士で、バイエルン公フランツと並びミュンヒェン上流社会で随一の名士であり、筆者もこののち現代史研究所やバイエルン・カトリック・アカデミーの会合で頻繁に見かけることになった。バイエルン自由国政府で1970年から1989年まで文部大臣を務めたことからも分かるように、進歩派の目立つドイツ学界においては珍しい保守派のカトリック系政治学者であり、1962年からミュンヒェン大学のショル兄妹研究所で政治学正教授を務め、のち1988年から1999年の退官まで同大学のロマーノ・グァルディーニ講座正教授として「キリスト教世界観・宗教＝文化理論」を担当した。このマイヤーには、一時は連邦大統領候補の呼び声もあった。今回の企画は、マイヤーの回顧録[1)]刊行を契機としたものだった。

バイエルン・カトリック・アカデミーのホール
（5月14日）

2012年6月23日には、「仏教との対話」という企画があった。この企画はアウクスブルク大学基礎神学特任教授カタリナ・ケミングを中心に、上智大学、ボン大学で教鞭を執ったイエズス会士・基礎神学者ハンス・ヴァルデンフェル

スらが参加して行われた。カトリック・アカデミーでの仏教論議ということで、筆者は興味津々であったが、仏教に対する評価が余りに好意的なのに驚いた。その際評価の基準は、社会的活動に熱心であり、人間を常に共同体の一員として見ているというもので、カトリック的観点から共感できる仏教の側面のみを強調している印象があった。仏教という場合、念頭に置かれているのは主に日本のそれであり、日本人参加者としてはその一面性を指摘したい気にもなったが、この時は傍観者に徹した（今日ではこの時発言しなかったことを後悔している）。第二ヴァティカン公会議以来標榜される「宗教間の対話」を進めるために、意識して異宗教を好意的に論じているように思われた。このように壇上で発言する神学者は皆仏教を称讃したが、観客には余りの高評価に違和感を表明する女性もおり、企画者と聴衆との間には温度差があるようだった。

3日後の2012年6月26日には、「無神論と信仰の未来」という企画があった。ラッツィンガー・ハーバーマス論争を思わせる刺戟的な企画に、筆者は勇んで赴いた。無神論側として登場したのは、ベルリン大学哲学正教授、一般哲学会理事長のヘルベルト・シュネーデルバッハである。彼はテオドル・アドルノ、ユルゲン・ハーバーマスの指導で教授資格を取ったフランクフルト学派の一員であり、宗教批判で知られる人物である。これに対しキリスト教を擁護する立場で登壇したのは、宗教哲学・アラビア哲学・中世哲学を専門とする、ミュンヒェン大学正教授レミ・ブラーグであった。この人物は以前パリ第一大学で教鞭を執っていたフランス人で、ミュンヒェン大学ではハンス・マイヤーの後任としてロマーノ・グァルディーニ講座を担当している。討論は、シュネーデルマンが軽妙な弁舌で指導権を握り、ドイツ語が万全ではないブラーグが守勢に立っている感じがあった。結局神の存在を積極的に証明することは困難なので、無神論、不可知論との対話には無理があるように思われた。聴衆の質問も、どちらかと言えば無神論側に加担するものが目立った。印象的だったのは、ブラーグが「無神論は死すべき運命にある」と述べたのに対し、聴衆からの抗議があり、言い過ぎた部分を撤回するという状況が見られたことだった。司会役のシュラー神父も、討論の展開にやや困った様子であった。帰宅するとき一緒になった参加者の或る夫婦が、無神論優勢の展開に憤慨していたのが印

象的であった。

2012年9月14日・15日には、バイエルン・カトリック・アカデミーとトゥツィング福音アカデミーとの共同企画で、カトリック神学とプロテスタント神学との対話企画「生命の教会統一運動――倫理的問題でも？」が行われた。討論の場所はいつものカトリック・アカデミーではなく、エゴン・バールの「接近による変化」講演で有名な、トゥツィング福音アカデミーである。トゥツィング福音アカデミーは全体が一つの宮殿で、夏の明るい日差しの下で、シュタルンベルク湖畔の風景がこの上なく美しかった。しかしトゥツィングはミュンヒェンの中心街から通うと一時間半ほどもかかり、頻繁に通うにはやや遠すぎで、企画もカトリック・アカデミーと比べると地味であり、挑発性や遊び心が不足しているように思われた。だがこのときばかりは、筆者も二日間に亙って頑張って通うことにしたのである。話題は生命倫理、環境保護、尊厳死に関することで、期待に反して双方の正面からの衝突は見られず、調和的な姿勢が目立った。参加したカトリック神学者は出来るだけ知的で自由主義的に振る舞っているように思われた。プロテスタント側からも、カトリック教会の女性聖職者否定に関する軽い皮肉が口にされた程度であった。

福音アカデミーでのシンポジウム
（9月14日トゥツィング）

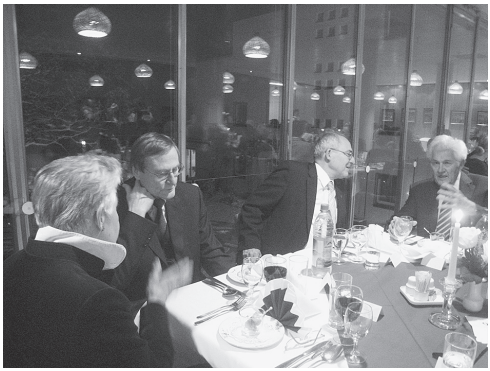
バイエルン・カトリック・アカデミーの学術講演会は、神学だけを扱っている訳ではない。バイエルン史も好んで扱われるテーマの一つである。7月6日・7日にはミュンヒェン大学歴史学科との共同企画「摂政王子時代――君主制の黄昏？」が行われた。筆者が聞いたのは6日19時からの講演「現代への入口における君主制の表現――摂政王子ルイトポルト・フォン・バイエルン像」で、講演者は元バイエルン国立美術館長ラインホルト・バウムシュタルク

教授であった。古き良き時代の象徴と今日愛好される摂政王子ルイトポルトが、バイエルン各地で立像、騎馬像などの形で表現されていることを紹介した、美術史の講演であった。この講演のお蔭で、その後筆者はミュンヒェン市内の多くのルイトポルト像を意識して見るようになった。11月27日の企画「1812年　モスクワのナポレオン」は、バイエルン軍に多くの犠牲者を出したナポレオンのモスクワ遠征を扱ったものである。筆者が聞いたのは17時45分からのユリア・ムルケン博士（テュービンゲンのギムナジウム教授／ディーター・ランゲヴィーシェ門下生）の講演「バイエルンの個人文書に見えるナポレオンの一八一二年ロシヤ遠征」で、ムルケンはバイエルン兵士の回顧録を分析し、ドイツ・アイデンティティが希薄でバイエルン・アイデンティティの方が強く見られるという主張を展開した（尤もムルケンによればこの回顧録は、バイエルンの自立性を強化しドイツ統一に距離を置く政策を採っていたマクシミリアン二世の時代に改稿されたというので、1812年当時よりバイエルン・アイデンティティを強めて改稿されているのではないかと思われたが、ムルケンはそういう配慮はしていないようだった）。

バイエルン・カトリック・アカデミーでは現実政治も盛んに扱われた。5月6日、フランス大統領にフランソワ・オランドが当選すると、アカデミーでは急遽オランドに関する分析の会が行われた。10月17日には、CDUの重鎮ヴォルフガング・ショイブレ連邦財務大臣の講演会「ヨーロッパはその欲望ゆえに没落するのか」が行われた。後者にはコール政権の連邦財務大臣だったテオドル・ヴァイゲル（CSU）も参加していた（同政権でショイブレは連邦内務大臣であった）。

2013年1月12日、筆者のミュンヒェン現代史研究所での受入研究者である前所長（ミュンヒェン大学名誉教授）ホルスト・メラーの古稀祝賀晩餐会が、バイエルン・カトリック・アカデミーで盛大に行われた。メラーは1943年1月12日ブレスラウ生まれのカトリック教徒で、このアカデミーの学術顧問にも名を連ねている。ヘルムート・コールの軍師役であったメラーは、珍しいキリスト教民主／社会同盟系の歴史家で、ベルリン自由大学でトーマス・ニッパーダイの助手を務めた近世・現代史家である。彼はパリのドイツ歴史研究所

長などを経て、1992年以来連邦・州共同出資の同研究所の指導を担い、2011年に引退した。メラーは2000年、同同盟系の「ドイツ財団」からエルンスト・ノルテが受賞した際、嘗ての師の一人である彼の讃辞を披露する役柄を引き受けたため、ベルリン大学教授ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラーら左派言論人から所長辞任を求める大バッシングを受けたが、メラーは結局辞任しなかった。この時はメラーの古稀を記念して、現代史研究所で前日から独仏政治史に関する研究会が開かれており、晩餐会にも多数のフランス人も招待されていた。晩餐会の招待客には、エドムント・シュトイバー元バイエルン首相などの姿も見られた。



ホルスト・メラー教授誕生会（1月12日）
（左端がニッパーダイ夫人、中央右がシュラー神父）

筆者はこの晩餐会に当初招かれていなかったが、当日になって私も1月12日が誕生日だと伝わり、急遽招待された。それどころか、メラーの配慮で私の席はニッパーダイ夫人の隣となり、シュラー神父とも同じテーブルになった。メラーの挨拶の末尾で、筆者も「誕生日の人」（Geburtstagskind）として紹介され、このため筆者はハンス・マイヤー教授、シュラー神父、ニッパーダイ夫人、メラー家の人々など、この日の重要人物と言葉を交わす機会を得た。けれども筆者は、学問的な理由ではなく、単に「誕生日の人」、或いは遠隔地からの来訪者だというだけで注目されたのであり、この光栄にも複雑な気持ち

ハンス・マイヤー教授
（1月12日ホルスト・メラー教授誕生会）

が残った。

因みにキリスト教関係の講演会は、ミュンヒェンではカトリック・アカデミー外でも行われた。12月4日19時30分から、ミュンヒェン大学大講堂で英人ジョン・レノックスの講演「学問は神を葬ったのか？」が行われた。古典的な雰囲気のこの大講堂は、入口にアテナの頭部が飾られ、その下に「真なるものは神に似たり」（DAS WAHRE IST GOTTAEHNLICH）というゲーテの言葉が掲げてあった。1945年生まれのレノックスは数学者で、オクスフォード大学教授であった。彼はドイツ留学の経験が有り、講演は見事なドイツ語で行われた。レノックスはこの世界の精緻な構造は、神の様な外部者の導きなしには考えられないと力説した。レノックスが神の存在証明として述べるのは、ひとえにその点であった。レノックスは各分野の業績赫々たる自然科学者たちが、神の存在に関して同じ見解を採っていることを強調した。とはいえそうした露骨な権威主義が、神の存在証明になっていないことはいうまでもない。結局のところ、神とは人知を超えた領域のものであり、人知で存在、不存在を「論証」しようとすること自体に限界がある。限界があるのに、恰も論理的に「論証」できているかのように語る数学者レノックスの自信たっぷりの論調には驚かされた。

## 第七章　公立学校での教育

バイエルン文部大臣ルートヴィヒ・シュペーンレ（1961年ー）は、2012年10月8日にユンゲ・ウニオン（ミュンヒェン市マックスフォルシュタット支部）の集会でこう喝破した。「ラテン語、ギリシア語はヨーロッパ文化の共通基盤であり、ヨーロッパに居住する者はそれを学ぶ必要がある。」この発言は、移民系と思われる或る女性（子供を通学させている母親）が、古典語教育など不要ではないかと語気を荒げて質問したのに応答したもので、ユンゲ・ウニオン関係者から歓迎の拍手が上がった。この発言を聞いて、筆者は「ヨーロッパ文化」継承の場であるバイエルンの公立学校を訪ねることを思いついた。その際、特に言語、歴史、宗教の授業に狙いを定めた。筆者は以下で示す三校を訪れたが、いずれも或る日突然筆者が校門をくぐり、すぐに校長或いは副校長を

紹介されて予定を決めたものである。勿論こちらも身分と意図を説明しはしたが、どの学校からも当惑されず、たちどころに授業参観を快諾されたのには驚いた。ただ直接訪問した場合は快諾されたものの、Email で打診したものは返事がないか（或るギムナジウム）、断られた（或る実科学校）。

シュペーンレ文相の講演（10月８日）

2012年12月 3 日、筆者は教員宿舎の日本人の仲間たちと、近所のテュルケン通（マックスフォルシュタット区）にある公立小学校の見学に行った。この地名は、バイエルン選帝侯が土木工事に使役したというトルコ兵俘虜に因むものだが、今日そこはミュンヒェン市の中心街であり、トルコ人の痕跡は全くない。この地区はミュンヒェン大学本館のすぐ裏で、一般に知的水準が高い家庭が多い（例えば我々が住んでいた教員宿舎からも子弟が通学する場合がある）、将来の進路は 2 、3 年生の成績で事実上決まるが、成績が悪くても子供のギムナジウム行きを望む親は居ると、事前相談の際に校長は説明していた。近辺には「アルター・ジンプル」など飲み屋も多いが、生徒に悪影響はないとの話だった。校舎は古い建物を利用し、内側に狭い校庭があった。当日の授業前に各教室を案内されたが、どの部屋にも Adventskranz が飾られていた。但し十字架は、教室によってあったりなかったりだった。教師は校長以下全員が女性で、男性は居ないのかと問うと、「男性はもっと上の学校で教えたがるものだ」との返答であった。

1 時限（8:45－9:30）の「国語」（Deutsch： 1 年生）は、若い女性教師に指導され、踊りなどを取り混ぜたり、生徒に 1 人ずつ話をさせたり、S の文字に関する勉強をしたりという内容であった。生徒は従順だったが、やや騒がしくなると、教師は鐘で静かにさせた。20人ほどの教室で、トルコ系と思われる子が 1 人居たが、移民系が目立つという感じはしなかった。教室には十字架が掲

げられていた。

2時限（9:35－10:20）の「宗教」（Religion：カトリシズム：3年生）の前に、生徒同士の喧嘩があった。入ってきた中年の先生が叱り、生徒は一斉にGrüß Gottと言って授業になった。教室を暗くし、前で車座に座って蠟燭をつけ、皆で祈りの言葉を唱えた。次いでAdventskranzや降誕祭のことが説明され、ギターの伴奏で歌がうたわれた。やがてイサクの子ヤコブの逸話、聖バルバラの逸話が紹介され、詩が朗読された。外国系の生徒は目に付かなかった。教室に十字架はなかった。

授業の区切りには鐘が鳴らされる仕組みになっている。次は休み時間で、我々は校長や教師たちと一堂に会した。職員室には個席がなく、皆がコーヒーを持ち寄ってロの字型に座わり、我々と質問や討論を行った。

3時限（10:45－11:30）は「宗教」（プロテスタンティズム：3年生）である。或る生徒から我々に「こんにちは」と日本語で声を掛けてきた。教師はOHPで詩を示した。当初座りっぱなしで生徒も退屈しているかに見えたが、やがて東方三王のイエス参詣のロールプレイが始まった。授業後、筆者は教師に、宗教の成績をどうやってつけるのかと問うと、知識を問う試験をしてつけるとの返事であった。外国系の生徒は目に付かなかった。教室には十字架があった。

4時限（11:30－12:15）は「国語」（3年生）であった。代表の生徒が我々にドイツ語で歓迎の挨拶をした。静かな音楽を聴き、詩を朗読し、討論をした。生徒の注意を促すのに、トライアングルが用いられていた。その後授業は小グループに分かれ、Elfchenと呼ばれる11語の短い詩の作成、披露に移った。詩は想い付かない子もいるようだった。教室に十字架はなかった。

2012年12月13日、愛知県立大学ドイツ語圏専攻からケルン大学に留学中の学生・山口恵吏氏と共に、ミュンヒェン北部にあるハンゼルマン通の小学校に見学に行った。ここはテュルケン通の小学校長と事前相談した際、移民系住民が特に多い地域の小学校として紹介されたところである。正直なところ、テュルケン通の小学校は規律が行き届いている印象があったので、筆者はウルズラ・ザラツィンの近著が描いたような荒廃した教育現場を見たいと密かに考え

ていた[2)]。ハンゼルマンとは、ラッツィンガー大司教の時代にバイエルン・ルター派教会監督だったヨハンネス・ハンゼルマン（1927年－1999年）のことだろう。小学校は静かな住宅地の中に在り、前衛的な建築様式である。建物は市の所有、職員は州の帰属で、授業料は徴収しないという。

ハンゼルマン通小学校の歓迎行事
（12月13日）

見学の日は雪が積もり、まだ真っ暗な中で訪れた。生徒は見るからに多人種的である。8:00に入口で校長と会い、その場で歓迎行事が行われた。建物は1階から最上階まで吹き抜けになっており、上から大きなAdventskranzがぶら下がっている。生徒や教員が皆吹き抜けに顔を出してきて、降誕祭の歌をうたって我々を歓迎してくれた。授業開始までに、用意されていた資料に基づき、学校の概要について説明を受けた。生徒は327人で、32の民族から成り、移民的背景を持つ者が80％に上ること、Frauenhaus（駆込寺の類）から通う生徒も居ること、多文化性に誇りを持ちつつ伝統や習慣の維持に熱心であること、補助が必要な生徒も必要でない生徒も混合教育をすることなどが示された。なお卒業生のうち、56％がギムナジウムか実科学校に進学し、残りは中等学校（Mittelschule：バイエルン州のHauptschule）に進学するということであった。

我々はまだ時間があったので、校長に質問をした。「ドイツ語や、樅の木、Adventskranzなどキリスト教の習慣を徹底するのは大丈夫か」――「強制はしないがバイエルンの文化を知る［kennenlernen］ことは必要だと考えている」。「娘が体育の授業、特に水泳に加わるのを拒否するイスラム教徒の親が居るのではないか」――「服装を工夫してでも全員参加に固執している」。「国旗掲揚・国歌斉唱の儀式はあるか」――「ないが、［バイエルン・？］アイデンティティの育成は重要だと考えている」。「十字架の掲示はどうしているか」――「個々の教員の判断に委ねている」。「実績を上げろという圧力はあるか」

――「あるが、それは州からよりも両親からある」。「ザラツィン夫人が描くベルリンの学級崩壊をどう思うか」――「ベルリンの教育は自由を重んじるが、バイエルンの教育は家族やキリスト教を重んじる」。尚校長室には十字架が掲示されていたが、イエス像がない素朴な十字架で、しかもカラフルに彩色されていた。

1時限（8:30－9:00）は、移民系生徒への「ドイツ語促進コース」（DFK：Deutschförderkurs）を見学した。生徒たちは我々を歌で歓迎した。黒板には雪達磨（Schneemann）の絵が描かれている。教師は物を渡し、生徒はそれをドイツ語で言った。相互会話の時間もあった。生徒は活発に手を挙げるが、よく見ると当然ながら生徒によって活発度に差があった。教室に十字架はなかった。

2時限（9:00－9:30）は、入学前の幼児（5、6歳）を対象とした「ドイツ語準備コース」（Vorkurs Deutsch）であった。参加していた子供は、ヴェトナム人、アルバニア人、ポーランド人、ボスニア人などであった。教師は単語とその性を教えた。余り話せない子もいたが、しばらくするとすぐに話せるようになるのだと教師は言った。教室には十字架はなかった。

3時限（9:40－10:25）は、1年生の国語である。この日の課題はwas、woなどの練習で、Mimiという鼠が主語にされていた。この授業は、「名誉職」（ボランティア）の老婦人が補助に当っていた。教室に十字架はなかった。

4時限（10:45－11:30）は、4年生の「哲学」と題した授業である。生徒に意見を言わせることを主体にした授業で、この日のテーマは「故郷」（die Heimat）である。子供たちは喋るが、類似の内容の繰り返しでもある。いま発言したばかりの子供がすぐにまた挙手したりもする。「故郷」から連想するものとして、出自、安心、母、友人などが挙げられていくが、親の離婚について語る子、故郷に安心なしとするコソヴォ出身の子も見られた。教室に十字架はなかった。

5時限（11:30－12:15）は、3年生の「英語」である。自己紹介の練習が主体で、ひたすら会話練習である。皆よく挙手して自己アピールをするが、集中していない子も見られた。教室には校長室と同じカラフルな十字架があった。

6 時限（12:15－13:00）は、3 年生の「倫理」である。これはこの学校では「宗教」の代替である。黒板に Adventskranz が描かれ、4 つの蠟燭は Friede、Glaube、Liebe、Hoffnung を夫々表現すると説明があった。降誕祭は希望の時期だと説明され、各自が自分の希望を発表した。道徳を説教する感じではない。パッフェルベルのカノンが低くかけられている。教室の後ろには白木の十字架が掲げられているが、教室の前には切り紙のモスクも貼られていた。

2012年12月14日、再び山口氏とミュンヒナー・フライハイトに近いカール・テオドル通のマクシミリアン・ギムナジウムを見学に行った。このギムナジウムはミュンヒェンでも名門校の一つで、マックス・プランクやフランツ・ヨーゼフ・シュトラウスなどが輩出し、キームガウ・ギムナジウムの生徒だったヨーゼフ・ラッツィンガー（教皇ベネディクトゥス一六世）もミュンヒェンで防空補助員をしていた時代に一時授業を聞いていたことがある。「マクシミリアン」は、創立者であるバイエルン王マクシミリアン二世に由来する。この学校の見学交渉は、副校長の男性に行った。博士号を有するこの男性は自分の執務室を有しており、そこには十字架上のイエス像（Kruzifix）が掲げられていた。

マクシミリアン・ギムナジウム
（12月14日）

1 時限（8:10－8:55）は12年生（最終学年）の「国語」である。生徒は16人で、教師はジャケットにノーネクタイ、ジーンズの男性である。教材はトーマス・マンの『ベネツィアに死す』で、予め読んできた部分について内容を確認し、議論する。全員白人で、挙手を経た発言も私語も多く、女子は化粧をしている。或る男子生徒は女子生徒と並んで座り、右手で女を抱いて可愛がりながら、左手で挙手をして図々しく発言している。 1 時間目だからか、2 名がバタバタと遅刻してきた。黒板はなく OHP を用いているが、文字は小さく読みにくい。教室全体が古代ローマ風で、時計も十字架もなかった。

2時限（8:55－9:40）は6年生の「英語」である。教師が入ると皆起立し、“Good morning, Miss Bugger!”と挨拶した（Miss なのか Ms. なのかは聞き取れなかった）。教師はほぼ英語だけを話し続け、速度は速く、挙手も多い。生徒は25人で、黒人が1人、女子が11人居る。宿題を披露させたり、教科書を閉じて話させたりする。教室には時計や Kruzifix に加え、蠟燭を燈した Adventskranz があった。

3時限（10:00－10:45）は12年生の「歴史」だったが、担当教師から、今日の授業は DVD の前半部を見るだけで、討論もないと言われた。そこで山口氏のみがそちらに行った。内容は、1972年のミュンヒェン五輪の際にイスラエル選手団が PLO テロリストに襲撃された事件だったという。

同じ時間に筆者が見たのは、6年生の「ラテン語」である。教師は余り愛想のない、坊主刈、ジーパン、トレーナーの男性教師である。授業開始時に全員起立し、“Salve …”云々と長い挨拶をした。教師は OHP でカラカラ浴場の写真を示し、生徒も全員ではないがよく挙手をした。後半では教師がラテン語の例文を示し、次々指名して早口で質問するが、生徒がそれをすらすら訳していた。生徒は20人以上で、東アジア系が1人居る。壁面には TABERNA ROMANA の文字があり、エジプトのヒエログリフも描かれている。教室には時計はないが、Kruzifix はあった。

4時限（10:45－11:30）は5年生の「宗教」（プロテスタンティズム）である。授業は皆が起立して、“Guten Morgen, Herr Lau!”で始まった。まずは歌をうたい、続いて教科書の出エジプト記15章20節を扱った。生徒は14人、内女子6人である。生徒たちは出エジプトの際、ヘブル人を追跡するエジプト軍が海に飲まれた逸話を扱ったが、盛んに挙手をして、当たらないと残念がった。

マクシミリアン・ギムナジウムの十字架
（12月14日）

授業ではロールプレイなども行われた。壁にはヒエログリフが描かれており、時計はないが、Kruzifix はあった。

5 時限（11：45－12：30）は10年生の「宗教」（カトリシズム）である。授業は皆が起立して、“Grüß Gott!”で始まった。教師は中年女性で、生徒は16人、内女子 4 人である。私語はかなり多い。授業は死と彼岸について扱い、OHP で使徒信経の死に関する部分を示した。ついでイエスの死に関連して、聖週間や復活のイコンが扱われた。教室には時計はないが、Kruzifix はあった。

6 時限（12：30－13：15）は 6 年生の「英語」である。授業は皆が起立して、“Good morning, everybody!”, “Good morning, sir!”で始まった。教師はジーパン着用の男性で、生徒は26人、内東アジア系 1 人、女子13人で、挙手は多いが私語も多い。OHP で会話を分析し、教科書の内容を分析したが、英語は British English であった（centre などが用いられていた）。ロールプレイには立候補者が多かった。教室には時計はあったが、Kruzifix はなかった。

全ての授業参観を終え、副校長と学校前で話した。学校の入口には、誇らしげに「王立マクシミリアン・ギムナジウム」（Kgl. Maxgymnasium）と記されており、バイエルン王マクシミリアン二世（開校時の支配者）と摂政王子ルイトポルト（現校舎完成時の支配者）のレリーフが掲げられていた。筆者がラテン語の授業が緊迫感に満ちていたと感想を述べると、副校長は、「本校は今日では珍しく、ラテン語に加えてギリシア語も全員必修にしている」と自信ありげに語った。

## 第八章　宗教的少数派

バイエルン王国がナポレオン時代にプロテスタント地域を領土に加えて以来、バイエルンはカトリシズムを中心に据えながら、常に他宗派、他宗教との共存を課題とする分邦であり続けてきた。

古カトリック教会は、ミュンヒェンではゼントリング門広場の聖ヴィリブロルト教会が中心となっている。古カトリック教会は、1870年の第一ヴァティカン公会議で教皇不可謬性が決議された際に、これに反対して分離した宗派で、権威主義的な教皇庁のカトリック教会に対して、「民主的」なカトリック

古カトリック教会の典礼
（1月13日聖ヴィリブロルト教会）

教会であるとの自己認識を有している。その思想的基盤を形成して破門されたイグナッツ・フォン・デリンガーはミュンヒェン大学教授だったが、今日ではそれほど目立つ存在ではない。聖ヴィリブロルト教会は小さな教会で、木々の間にひっそりと存在している。この教会の日曜礼拝を訪ねたのは、2013年1月13日のことであった。「古カトリック」というが、第一ヴァティカン公会議以前のカトリック教会の姿をそのまま保存している訳ではなく、「民主化」が進んでいる。典礼は「人民祭壇」を用いており、明らかに20世紀の産物である。また聖体拝領の際には、「人民祭壇」がある台の上（教皇庁のカトリック教会であれば聖職者、侍者、聖書朗読者などが居るところ）に司祭と共に信徒全員が上がる光景が見られた（写真参照）。

プロテスタント教会はミュンヒェンでは影が薄い。中心街に壮大なカトリック寺院が軒を連ねているのに対し、プロテスタント教会の存在は目立たない。ルーテル派教会のバイエルン領邦監督（Landesbischof）が説教をする聖マテウス教会は、ゼントリング門広場に面していて、ミュンヒェン最初のプロテスタント教会として由緒があるが、1833年に建築された新古典様式のものは1938年にNSDAP政権によって破壊され、1955年に再建された現在のものは完全な現代建築である。イザール川畔の聖ルーカス教会は歴史主義様式であり、華麗で壮大だが、中心街からはやや離れている。筆者はベルリンでは各所のプロテスタント教会を訪問してきたが、残念ながらミュンヒェンではその訪問を怠った。ミュンヒェンで筆者が訪問した唯一のプロテスタンティズムの礼拝は、2012年9月15日の福音アカデミーでのものに留まっている。

正教は、ミュンヒェンにはギリシア正教会、ロシヤ正教会などの聖堂を有している。バイエルンは、初代ギリシア王オトンをヴィッテルスバッハ王家から

出したことから、ギリシアとの歴史的な縁は深く、ケーニヒ広場も古代ギリシア風に作られている。このためか、ミュンヒェン市シュヴァービングには北墓地駅付近に巨大なギリシア正教会の聖堂「諸聖人聖堂」がある。この聖堂は正教会には珍しい現代建築だが、内部は黄金のモザイクとイコンによって古典様式で装飾されている。筆者はカトリック教会の復活祭から一週間後の2012年４月14日㈯、復活祭の徹夜禱に参加した。大きな教会堂は信徒で立錐の余地もない。悲しげな前半部が終わると、人々は聖職者を先頭に、一旦教会の外に出る。聖職者は教会外に設けられた舞台の上で、「ハリストス復活」（ハリストス・アネスティ）と宣言し、信徒は「実に復活」（アリソス・アネスティ）と答えた。聖職者がギリシア語の祈禱文を朗詠し、広いウンゲラー通は蠟燭を持った信徒で一杯になった。警官が出て、予め交通は完全に遮断されていた。

諸聖人聖堂（４月10日）

諸聖人聖堂での復活祭（４月14日）

諸聖人聖堂での復活祭行列（４月14日）

2013年１月６日は正教の降誕祭に当たっていた。この日筆者は、ミュンヒェン市オーバーギージングのリンコルン通にある「ロシヤ聖新致命者・表信者及び聖ニコライ聖堂」を訪れた。このロシヤ正教会は交通の便が悪く、ギリシア

正教会と比べると遙かに小規模だった。

ユダヤ教は、アザム教会にも近いザンクト・ヤーコプ広場に巨大なオヘル・ヤコブ・シナゴーグを有している。この広場には他にもユダヤ人団体の建物が幾つか立っている。筆者はベルリン時代、シナゴーグ訪問を怠ってしまっていたので、ミュンヒェン滞在中には是非一度と考えていた。インターネットで連絡先を見つけ、Eメールで金曜礼拝を見学したいと申し出たところ、電話をするよう指示があり、電話口ですぐに快諾の返事があった。そこで事前に参加証を取りに来るようにとの指示があったため、早速12月19日午前9時に受け取りに向かった。ところが驚いたことに、門番は筆者の訪問を全く諒解しておらず、しかもドイツ語が不自由で英語で話したいという有様であり、参加証など存在しないというばかりであった。押し問答の挙句、筆者は立腹して立ち去り、帰宅後Eメールで抗議したところ、翌日自宅に女性職員から丁寧な陳謝の電話があった。

ロシヤ聖新致命者・表信者及び
聖ニコライ聖堂（1月6日）

筆者がオヘル・ヤコブ・シナゴーグの金曜礼拝を参観したのは、12月21日である。16時に例の門番のところへ出頭すると、今度は筆者の名前の掲載された一覧表があり、「ナイフやピストルなど武器を携行していないか」と問われ、ないと返事をして入館を許可された。シナゴーグには直接は入れず、隣の会館の入口から入り、地下通路を通ってシナゴーグに到るようになってい

オヘル・ヤコブ・シナゴーグ（12月21日）

る。地下通路には、国民社会主義政権下でユダヤ人が収容された施設の地名が刻まれており、被害者としてのユダヤ人の過去を回顧する空間になっていた。これに対し、加害者としてのユダヤ人の過去を回顧する記念物などは、筆者が把握した範囲では一つも見当たらなかった。シナゴーグは現代的建築であるが、木目を生かした美しい作りになっている。入口にはドイツ語、ロシヤ語など各国語の対訳付きの聖書・祈禱書が置かれ、また黒い小さな頭巾が置かれていた。ユダヤ教では、頭を覆っていないことは神への不遜であると解釈する習慣があり、帽子のない参列者にはこの黒頭巾の着用を求めるのである。この日筆者は防寒のため、黒ソフト帽を被っていたため、この頭巾は用いず、自分の帽子をそのまま被り続けた。筆者は時間通りに来たが、シナゴーグには誰もいないようだった。落ち着いたところで周りを見回すと、地階の席の両脇に階段状に二階席、三階席が設けられ、薄い鎖のベールで被われているのに気付いた。部外者である筆者は、そうした脇の席がいいだろうと思いそちらに移ろうとすると、そこには既に何人かの女性がいて、ここは女性席だから男性は地階の席に戻るようにと注意されてしまった。要するにこのシナゴーグでは、地階の祭壇前の席は男性専用で、脇の階段上の隠れた席が女性専用なのである。やがて男性たち、家族連れなどが、徐々に現れ始めたが、礼拝所は広いため、なおガラガラの印象があった。黒いコートに黒い帽子の人物が何人か筆者のところにやってきて、筆者が来訪の趣旨を言うと、やや訛りのあるドイツ語で歓迎の言葉を述べた。彼らはこののち、儀式を先導する役割を果たすことになる。

この日行われた儀式は、概ね次のようなものであった。男性20人ほどが祭壇前の地階席に座っている。遅刻する者もおり、礼拝中に挨拶する光景も見られる。女性は8人ほどで、全員が両脇の階段席に居り、席の前にカーテンがあるため、その姿を男性から見ることは出来ない。「ユダヤ人」と一口に言っても、ヨーロッパ風、ロシヤ風、中近東風の人々が居て、出自の多様性を感じさせる。祭司は普通の背広を着ており、スカーフを被っている点のみが一般信徒と異なっている。祭司のうち、一人はカトリック司祭のような茶巾帽を被っている。男性は全員何らかの帽子を被っている。儀式は祈禱文の朗詠、説教、歌、朗詠と歌という構成で、キリスト教の儀式に比べると随分簡素な形態だっ

た。祭司や信徒はブツブツと呟きながら、体を前後に揺らした。後で聞いたところによると、これは祈りに専念している状態だということだった。説教はドイツ語で、道徳論ではなく、食事についての説明だった。歌はロシヤ民謡風の悲しげな旋律だった。

イスラム教は、ミュンヒェンに様々な言語で運営される多数のモスクを有しているが、筆者は2013年1月15・18日にゼントリング区シャンツェンバッハー通の「ミュンヒェン・トルコ系イスラム教共同体センター」を訪れた。このモスク兼集会場を運営するDİTİMは、トルコ宗教庁の傘下にあるイスラム教団体で、ケルンに壮大なモスクを建設中で、その賛否を巡り大論争を引き起こしていた。筆者はインターネットでこのモスクの存在を知り、電話したが通じなかったので、1月15日に直接訪ねてみることにした。U3のインプラー通駅から南に歩いたが、どうもそれらしい建物に出くわさない。向こうからイスラム教徒の中年女性二人が歩いてきたので、この辺りにモスクはあるかと聞いてみたところ、示してくれた建物は地味な工場風の2、3階建の建物だった。ミナレットはない。小さくDİTİMの表示があり、入口は裏通に面している。掃除夫らしい人物に、金曜礼拝を見学させてほしいと聞くと、建物の一角にあるトルコ用品店に案内された。そこには目付きの鋭い、しかし親切でドイツ語の達者な男性がおり、ドイツ滞在は30年以上であると話していた。この男性は筆者の願いを直ちに聞き入れ、更にモスクの内部を早速案内してくれた。モスクは、一階に玄関と手足を洗浄する部屋とがあり、二階に祈禱に使う大きな広間があった。正面に壁龕があるだけで祭壇がなく、正面の左右に説教台がある。床一面に敷き詰められた絨緞は緑の地に、人が並ぶ目安になるよう赤い線が引いてある。壁は木造で飾りがないが、後ろにはメッカのカーバ神殿の装飾用絨緞が掛けてあった。

金曜礼拝の当日、1月18日に筆者は約束通り12時15分にモスクを訪問したが、既に礼拝前の説教は始まっていた。説教はトルコ語であるが、筆者には残念ながら理解できなかった。とはいえ参加者にとって、どうも説教はそれほど重要ではないらしい。説教中はまだ人の集まりが悪く、屋外で談笑しているものもおり、説教の終わるまでに部屋に入ればよいと考えているようだった。説

モスクでの礼拝風景（1月18日）

教をするイマームの前でも、人々は胡坐など寛いだ姿勢で佇んでおり、ところどころで携帯電話が鳴ってしまうなど、あまり緊張感がなかった。しかし12時半を過ぎ、イマームが説教壇を降りて信徒の先頭に座る頃になると、広間は200人ほどの信徒で一杯になり、隣室にも信徒が溢れていた。インターネットでは女性の訪問可と書かれていたが、礼拝に来ているのは男性のみで、若い人もいたが、中高年が目立つ。服装は、イマームがターバン的な帽子を被っている以外は洋服だが、色彩は茶色や深緑が目立ち、全体の印象が非常に地味で、街中で見る西洋人とは明確に色彩感覚が異なる。年配者は白い編み物の帽子を被っていることが多い。着ぶくれしているのかもしれないが、みな恰幅がいいように見えた。人種は、黒人が数人いたが、殆どトルコ系であるように思われた。後ろの席から朗詠が始まり、やがて前のイマームの朗詠との掛け合いになる。朗詠はアラビア語で行われる。「アラーは偉大なり」の声に従い、立ったり、座ったり、額付いたり、右や左を向いたりという風景は有名だが、そこで礼拝の緊張感が最高潮になる。礼拝形式は、イマームも信徒とともに壁龕の方向（メッカの方向）を向くため、versus Deum の形式だと言える。12時50分過ぎから、徐々に人が帰り始めるが、半分ほどの人は引き続き祈り続け、13時過ぎに解散となった。キリスト教、ユダヤ教と比較すると、より一層簡潔で短い。部外者である筆者の訪問は迷惑がられるかと思っていたが、実際には余り気にされず、礼拝終了後に握手を求め、ドイツ語で挨拶してくる人も居た。

### 跋　伝統の維持と多様性の許容――バイエルンが目指す第三の道

筆者の10箇月のミュンヒェン見学は十分ではないが、それでもバイエルン

マクシミリアネウム入口の十字架
（1月17日）

CSU政権の目指す多文化共生の在り方が見えてきた様に思う。それは同化主義と多文化主義との中間を目指す路線である。同化主義とは、「バイエルン的なもの」に住民全てが合わせることを要求するものである。「バイエルン的なもの」の構成要素には、カトリシズムの行列、葱坊主屋根の教会堂、バイエルン方言、バイエルンの民族衣装や料理、アルプスと牧草地、十字架上のイエス像などがある。ドイツの他地方の場合、その地方固有のものを観念することすら困難な場合が多くなっているが、バイエルンの場合はまだ「典型的なバイエルン流」と一般に考えられている流儀がある。けれども個人の自己決定が尊重され、人間の流動性が高い今日では、政策としての同化主義はもはや「絵に描いた餅」でしかない。抑々バイエルン王国が成立した段階で、広大な領域の強制的同質化は抛棄されていた。これに対し多文化主義は、国であれ地方であれ、地域色という発想自体を否定する考え方である。多文化主義者は常に、多数派の抑圧に晒されている少数派を救済するという発想から出発するので、少数派のアイデンティティを断固応援する一方で、多数派には自己主張を許さない構図になっている。多文化主義は、少数派の個人や民族・宗教集団の「差異への権利」を重視するが、それを社会の中でどう統合していくかという議論にはそれ程熱心ではない。また「ドイツ文化」、「バイエルン文化」など地域文化のグローバルな（結局のところアメリカ由来の）文化への「差異への権利」にも冷淡である。この多文化主義を貫徹すると、結果的にはアメリカ大衆社会の流儀で世界を同質化することに繋がるだろう。ドイツでは緑の党から社会民主党の一部に多文化主義的傾向が見られる。バイエルンで万年政権を維持してきたキリスト教社会同盟（CSU）は、「典型的なバイエルン流」とされるものを断固応援しつつ、そこに参加しない者の存在も許容するという方針を採っていると

言える。バイエルンほど明瞭ではないが、キリスト教民主同盟（CDU）のアンゲラ・メルケル連邦宰相が進める「統合政策」も、多文化主義の問題性を指摘して、中庸の道を模索する点では同様だろう。中庸の道の宿命として、同化主義派からは多文化主義の、多文化主義派からは同化主義の疑いをかけられるが、現在のバイエルンが目指しているのは飽くまで中庸の道であるように思われた。

**注**

1）Hans Maier, Böse Jahre, gute Jahre. Ein Leben 1931 ff., 3. Aufl., München: C. H. Beck, 2011.

2）Ursula Sarrazin, Hexenjagd. Mein Schuldienst in Berlin, München: Diederichs, 2012.

〈前号訂正〉

233頁　「2013年4月16日の教皇ベネディクトゥス一六世の85歳の誕生日」

→　「2012年4月16日の教皇ベネディクトゥス一六世の85歳の誕生日」